

志賀直哉『網走まで』を読む  
- 「網走」という場所をめぐって -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富澤, 成實 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22062">http://hdl.handle.net/10291/22062</a>

志賀直哉『網走まで』を読む——「網走」という場所をめぐる——

富澤成實

はじめに

志賀直哉の『網走まで』において、登場人物の「女の人」たちが向かおうとしている「網走」という土地は、どのような場所なのだろうか。

かつて稿者は、主人公たちのエロスのな関係性を中軸に作品を読解しようとする試論のなかで、「『網走まで』は、こうして網走⇨黄泉へと向かう「女の人」を、彼女の湛える母としてのエロス性をいったんは享受した「自分」が、それでもあえて葬送する物語である」と述べた。委細は避けるが、「網走」を、彼らの生活空間からは大きく隔絶した最果ての地、さらには死者たちの暮らす黄泉のような別世界として、物語の内側から捉えたのだった。

本稿では改めて、「網走」という場所について、物語の舞台や当時の読者層に即した観点から検討してみたい。

『網走まで』は明治四三(一九一〇)年四月、『白樺』創刊号に発表された志賀直哉の短編小説である。「三つの処女作」(細川書店版『網走まで』あとがき<sup>2)</sup>、昭22・7)のひとつに作者自身が数えたこともあり、この小説は志賀直哉文学の原型として、これまでの研究史のなかでも注目を集めてきた作品でもあった。

タイトルの一部となっている「網走」という言葉は、作品本文中では、つぎのような一節のなかにあらわれる。

「どちら迄おいですか」と訊いた。

「北海道で御座います。網走とか申すところださうで、大変遠くて不便な所ださうです」

「何の国になつてますかしら？」

「北見だとか申しました」

「そりやあ大変だ。五日はどうしても、かかりませう」

「通して参りましても、一週間はかかるさうで御座います」(傍点稿者)

「網走」という土地は両者にとって、不案内な未知の場所としてあらわれている。物語の主人公である「自分」は、日光への旅の同行者である宇都宮の友人と合流するために、他方ヒロインの「二十六七の色の白い、髪の毛の少ない女の人」は、彼女によって「滝さん」と呼ばれる「七つ許りの男の子」と「赤児」の、合わせて二人の子どもを連れて最終的な目的地である網走に向かうために、上野駅を「午後四時二十分」に発車する「青森行」の汽車に、それ

それ乗車する。このように「網走まで」は、「自分」と「女の人」が上野駅で待機する客車のなかでたまたま出会い、そして宇都宮駅のプラットフォームで別れるまでを描いた物語である。

繰り返すことになるが、「網走」は主人公たちにとって、直接訪れたことはもちろん、間接的な情報さえほとんどもない、未知の土地である。目的地を尋ねた「自分」は、「女の人」に「網走」だと返答されても、それがどこかわからないようであるし、「網走」を指す「女の人」自身も、「網走とか申すところださうで」と答えたように、他者を介して伝え聞いた土地の名前以上のことは、ほとんど何も知らないらしい。彼女が知っていることといえば、同じく伝聞のかたちで得た、「大変遠くて不便な所」だという情報だけである。語り手としての「自分」も、「網走」について、超越的な地点から具体的な解説を加えるということも、ない。したがって、逆説的な言い方になるが、明らかかなことは、「網走」がひどく遠い地点にある土地であり、そのような遠方まで「女の人」は行く、ということである。「自分」はむしろ、「女の人」自身が、「網走」に至るまでの所要時間も行き方も、よくわからないまま向かっていることは、なおさら、彼女にとってそこがひどく遠い場所であることを、読者に強く印象づけることになるだろう。

このように「網走」については、そこが「北海道」「北見」の国のなかに位置する、ある遠い場所だ、ということ以上のことは明らかにされないまま、物語は進行するのである。しかし、そうであればなおさら、この場所について具体的にイメージしようと想像を膨らませたり、さらには、このように「大変遠くて不便な所」に、なぜ二人の幼い子どもを連れてまで「女の人」は訪ねようとしているのか、といった疑問が頭をもたげたりするのは、多くの読者にとってごく自然なことであるにちがいない。

そこで、まずは、タイトルそのものである「網走まで」の所要時間について検討してみよう。先に引用したとお

り、「通して参りましたも、一週間はかかるさうで御座います」と「女の人」自身は述べているが、果たして、上野発「午後四時二十分」の「青森行」の汽車に乗った彼女と二人の子どもは、一週間ほど後には網走に到着することになるのだろうか。

このことに関しては、すでに詳細な調査が行われているので参考にすることができる。実際に志賀直哉と親交があった、明治四一（一九〇八）年北海道岩見沢生まれの詩人・桜井勝美は、つぎのように説明している。

「網走まで」が書かれた時代、上野・青森間の汽車の所要時間は二十五時間半（「交通博物館」資料）であった。（中略）連絡船で北海道へ渡るわけだが、当時、青森発（函館経由）室蘭行の連絡船は、昼夜一便だけしかなかった。だから上野を午後発ったあの親子は、それから二日目の夕刻、青森に着き、その夜は青森で宿屋泊りということになる。そして翌日の便で函館経由室蘭へ行き、室蘭で下船する。そして室蘭では、月に三回だけ出航することになる。網走行の小さな汽船の出航を待つことになる（まだ網走への鉄道は未開通。陸路網走へ行くことは不可能）。何日か船待ちして、いよいよ出航した小さな汽船は襟裳岬の沖を通り、釧路、厚岸、根室、羅臼、斜里に寄港して（網走）<sup>3</sup>に行くのである。

上野駅を出発した汽車は二四時間以上をかけて翌日に青森駅に到着し、そこで一泊した後、つぎの日に出港する船便に乗り換えて室蘭でいったん下船し、さらに、おそらく一週間以上後に出港する網走行きの便に再び乗船して、いくつかの港に寄港したのち、ようやく目的地の網走に到着することになる、という。このように、「女の人」自身が「通して参りましたも、一週間はかかる」と理解しているようには到底いかなことは、明らかである。

また物語の時代設定については、桜井氏が「『網走まで』が書かれた時代」と書いたように、たとえば作者が作品を執筆した時期、すなわち「明治四十一年八月」<sup>1)</sup>というように捉えることができるだろう。

他方で、作品本文のなかに、具体的な時間を示す記述があるので、ある程度は特定することが可能である。「自分」は「女の人」の夫がどのような人物であるかを想像するが、その際に連想したのが曲木という、「自分」の学生時代の知人であった。その知人に触れた一節のなかに、「二三度続けて落第して、たうとう自分で退学して了つたが、日露戦争後、上州製麻株式会社とかいうのの社長として、何かの新聞で其名を見たぎり、今はどうして居るか更に消息を聞かない」(傍点稿者)という一文がある。そこで物語のなかの現在の時間について、「日露戦争後」からしばらく時間が経過した「今」、すなわち明治三十九年から、作品の執筆時である四一年くらいまで、というように推測することができよう。

物語の時代設定についてさらに細かく言えば、発表の直前にも再度原稿を見直す可能性があることを考慮すると、最終的にはそれを、「明治四〇年前後」というように考えることができるだろう。いずれにしても、このように上野駅から網走に至るまでの道のりは当時、たいへん厳しいものであつたのは疑いないことである。

しかし、この旅路の厳しさは、単に所要時間についてのことばかりではない。たとえば、先にヒロインたちはその道のりで、船便で青森から北海道に渡ることに触れたが、この船が青函連絡船であつた場合、それに乗り込むことがまた、厳しいものだったようである。桜井勝美は同書のなかで、「明治四十一年七月には、イギリス製の青函連絡船、比羅夫丸と田村丸が初就航し、所要時間が今までの六時間が四時間に短縮されたというが、「連絡船は今日のように直接棧橋に着くのではなく、遙か沖に停泊、一、二等客は小蒸気船で、また三等客ともなると、小蒸気船にひかれたはしけで沖まで」曳航、「しかも三等客は船の横の口からまるで荷物扱いのように気合をかけあいながら乗

船してた」(阪田貞之著『連絡船物語』)。その「三等客」のなかに子供づれのあの「女の人の」姿を思い浮かべると、胸がいたくなる」(傍点原文)と書いている。『連絡船物語』は昭和四五(一九七〇)年一月に日本海事広報協会より刊行された著書だが、このような文献を参照しながら桜井氏が指摘したように、所要時間が短くなってもなお、乗船することそれ自体の厳しさは、少しも変わるところはなかったのである。このように彼女たちの旅路は多大な時間を要し、かつたいへんな困難をとまなうものだった、と考えられるのである。

一方、〈明治四〇年前後〉の終わりの方を探って、『網走まで』が発表された明治四三(一九一〇)年を物語中の現在の時間であると考えれば、ある程度は陸路を利用することも可能だったようだ。菊地慶一は、網走まで鉄道が延びたのは明治四五(一九一二年)年になってのことであり、『網走まで』が発表された「明治四十三年では、札幌から帯広、池田を経て北見まで鉄路を利用し、北見からいわゆる囚人道路を歩いて、網走へ到着する」ことを指摘している。このように陸路を最大限に利用したとしても、最終段階では長い距離を徒歩で、しかも赤ん坊と幼児を連れて行かなければならないとすれば、結局は彼女の抱える困難さが多大であることに変わりはない、ということになるだろう。むしろ、上野駅に停車中の汽車に乗り込む場面から始まる彼女の長い旅路は、こうしてみると、困難で過酷であるというよりも、そもそも達成を期待できないような無謀な試みのようにさえ思われてくるのである。ここでは触れないが、はじめに少し述べたとおり、このような意味でも、彼女らの網走行きとは黄泉への旅路にほかならないようにも思えるのである。

## II

これまで、「網走まで」のヒロインである「女の人」の旅路が困難で過酷なものであるという以上に、目的地である網走への到達は、ほとんど不可能でさえあることを述べてきた。

ところで、最果ての地・網走に、「女の人」たちは何のために赴こうとしているのだろうか。

たとえば、篠沢秀夫は、「実は、私は長年、この女性が網走刑務所に入っている夫に面会に行くのだと思い込んでいた」と述べている。むろん、「思い込んでいた」と断り、「刑務所との連想は、注意深く読めば避けられた誤読であった」と明確に記しているとおり、篠沢氏の指摘の本質は、「この作品のテキスト内では、網走は単に、見知らぬ遠い所という価値しか持たない」ということであるのは、言うまでもない。先に稿者も述べたとおり、「自分」や「女の人」にとって「網走」という土地は、最果てにある未知の場所としてあらわれている。

だが、それにしても、網走刑務所に収監されている夫に「女の人」は会いに行く、というように篠沢氏が「誤読」したのは、なぜなのだろうか。そしてこのように網走と刑務所を結びつけながら「網走まで」を読む読者は、何も篠沢氏ひとりに限らないのだが、それはどうしてなのだろうか。

このような点に関して興味深いことが、作者・志賀直哉自身の発言を含めて、先に引いた桜井勝美「志賀直哉の原像」のなかで触れられているので、少し長くなるが引いてみよう。

「網走まで」の〈網走〉を、必ずといっていいくらい〈刑務所〉のイメージと結びつけてこれを解説している本が多い。これは間違いである。極端なものになると、網走の刑務所には、その「女の人」の夫が服役中で、いま



子供を連れてはるばる面会に行くところであろうなどと、もってもらしい解説をしているものもある。(中略) 先生ご自身、作品が間違つて解釈されていることをご存じで、

「あれはたいぶ誤解されているようだね。」と、そのことをおっしゃられ、「あのころ網走に刑務所はあったのかね。」

とお聞きになった。わたしは、先生が「網走まで」を執筆されたころ、すでに網走には監獄があったこと、囚人たちの多くは道路開サク、築堤、架橋、それに自給自足用のための開墾、耕作、伐採、炭焼など、厳しい監視付きでの重労働の日日で、凡そ今日の刑務所のような所内服役とは様相がちがっていたこと。まして面会などというなまやさしい環境ではなかったことなどを申しあげた。

「そうかね。ぼくは監獄のあることなど、全然知らなかった。どうもあれは当世風な読み方で誤解されているね。」

先生は重ねて誤解、ということばをいわれた。<sup>10</sup>(傍点原文)

ここで桜井勝美は、網走と刑務所を結びつけるような作品の読解の仕方が「間違い」だという見解を述べているが、ここで改めて注意を向けたいのは、むしろ志賀直哉自身の発言についてである。

「網走まで」は網走と刑務所を結びつける「当世風な読み方で誤解されている」と困惑気味に述べた志賀直哉はさらに、作品の創作当時、そもそも網走に刑務所があることを知らなかった、と発言している。しかし、桜井氏が説明したとおり、実際にはそれはあったのだ。明治二三(一八九〇)年四月に「釧路監獄署網走囚徒外役所」として開設された刑務所は、その後「網走囚徒宿泊所」、「釧路集治監網走分監」、「北海道集治監網走分監」、「網走監獄」とい

うように改称されながら、現在は「網走刑務所」という名称で網走の地に置かれている。「網走監獄」の名称は明治三六（一九〇三）年四月から、「網走刑務所」の名称は大正一一（一九二二）年一〇月からそれぞれ開始するので、すでに述べたように物語の時代設定と推定される明治四〇年前後には、「網走監獄」として実在していたことになる。したがって、たとえば「白樺」創刊号を手にとった当時の読者が、むろん全員ではないにせよ、作者の意図などとは無関係に、網走監獄をイメージしながら「網走まで」を鑑賞したとしても、それは少しも不思議なことではないのである。

一方で、時代は下り、志賀直哉がこのように発言した時点の同時代の読者については、どのように考えることができるだろうか。

網走に監獄があることなど知らなかった、という志賀直哉自身の発言は、先に引用したように、桜井氏が直接、志賀と面談するなかで出てきた言葉である。東京都渋谷区常盤松に居を構えた志賀直哉をしばしば訪ねたという桜井氏は「あとがき」のなかで、「本書は、志賀先生晩年の十年ほどの間、格別のお近づきをいただき、折にふれてお教えいただいたことをもとにして書いたものである」と書いているので、この志賀の発言は、志賀が昭和四六（一九七二）年に八八歳で亡くなるまでの約一〇年間、すなわち昭和三〇年代半ば以降のものだということになる。とすれば、先の「当世風の読み方」とは、昭和三〇年代後半から四〇年代前半期のころの読み方を指しているということになるだろう。そしてこのころ人気を博した映画に、網走刑務所を舞台にした一連の作品があったことはよく知られているとおりである。

これらに関しては、「博物館網走監獄」公式サイトに、「監獄秘話 第10話 監獄・網走に関する映画」として、昭和二五（一九五〇）年公開の「愛と悲しみの彼方へ」（監督：谷口千吉）から平成二三（二〇一一）年公開の「大地

の詩」(監督・山田火砂子)まで、合わせて二四編の映画作品が列挙されている。<sup>13)</sup>ここではこれらを参考にしながら、改めて、そのなかでも大ヒットした高倉健主演の作品に限定して簡単に見てみよう。

網走刑務所に関わる高倉健主演の映画作品は、合わせて一八作品に及び、それらは「網走番外地」シリーズと「新網走番外地」シリーズの二つに分けることができる。前者はすべて石井輝男の監督作品で、第一作目の「網走番外地」(昭和四〇・一九六五年公開)から第一〇作目の「網走番外地 吹雪の斗争」(昭和四二・一九六七年公開)までの一〇作品であり、後者はそれぞれ、マキノ雅弘・降旗康男・佐伯清の監督作品で、第一作目の「新 網走番外地」(昭和四三・一九六八年公開)から第八作目の「新網走番外地 嵐呼ぶダンブ仁義」(昭和四七・一九七二年公開)までの八作品である。こうして網走と刑務所は昭和四〇年代に、高倉健の姿とともに大衆のよく知るところとなったのである。とすれば、昭和三〇年代後半期から四〇年代前半期のころの「網走まで」についての「当世風の読み方」が網走と刑務所を結びつけながらのものであったのは、当然といえは当然のことだったのである。篠沢秀夫の「誤読」も、このような時代的な土壌から、いわば必然的に生じた結果だった、ということができるとはちがいない。

これまで、「網走まで」のヒロインが向かう「網走」という場所について、物語の舞台や読者層に即した観点から考察してきた。舞台である明治四〇年前後の網走は、物語の始点である上野駅からはあまりに遠く、そのため幼い子ども二人を連れてそこを目指す彼女の旅路は過酷で困難である以上に、現実的には実現不能ともいえる、無謀な試みでさえあった。一方、作者の認識とは別に、この当時の網走には確かに「網走監獄」が実在していた。後年、作者の意図を越えて、昭和三〇年代後半から四〇年代前半にかけての読者が、刑務所と結び付けながら作品を読解したのは、網走刑務所を舞台とした映画作品の流行を考慮すれば、ある程度は納得のいくことだった、ということができらう。

注

- (1) 拙稿「志賀直哉『網走まで』の深層——「女の人」をめぐるエロスと葬送——」(『明治大学人文科学研究紀要』第55冊、二〇〇四・三)、一四ページ。
- (2) 他の二つについて、作者は同書のなかで『菜の花と小娘』と『或る朝』を挙げている。
- (3) 桜井勝美「志賀直哉の原像」(宝文館出版、一九七六・一二)、二二六―二二七ページ。
- (4) 「白樺」同人の作品集『白樺の森』(新潮社、大七・三)に「網走まで」を収録する際に、このように執筆年月が明記された。
- (5) (3)に同じ。二二七―二二八ページ。
- (6) 「網走歴史の会」公式ホームページ、「網走文学散歩 4. 終着網走駅の風景」(okhotsk.vis.ne.jp/rekishi/sanpo/sanpo4.htm)、二〇一一・六に閲覧。
- (7) 篠沢秀夫「志賀直哉ルネッサンス」(集英社、一九九四・四)、四九ページ。
- (8) (7)に同じ。五一ページ。
- (9) (7)に同じ。四九ページ。
- (10) (3)に同じ。二二二―二三三ページ。
- (11) 重松一義「博物館網走監獄」(網走監獄保存財団刊、二〇〇二・一)、一四―三九ページを参照。
- (12) (3)に同じ。三五五ページ。
- (13) 「博物館網走監獄」公式サイト、「監獄秘話 第10話 監獄・網走に関する映画」([https://www.kangoku.jp/kan-goku\\_hival1.htm](https://www.kangoku.jp/kan-goku_hival1.htm))を参照。二〇一一・六に閲覧。

※ 志賀直哉作品からの引用は、全一五巻からなる『志賀直哉全集』（岩波書店、一九八三・四～一九八四・七）と全二二巻・補巻六からなる『志賀直哉全集』（岩波書店、一九九八・二～二〇〇二・三）に拠った。ただし、旧漢字は新漢字に改め、ルビは適宜省略した。

（とみざわ・しげみ 政治経済学部教授）